

## マルコによる福音書 8 章 11 節～21 節

2016 年 8 月 25 日

古本 靖久

1、聖歌 478 番 「聞けや愛の言葉を」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 76 ページ）

4、テキストの位置

前回の会では、4000 人の供食物語を見てきました。そこでは、イエス様がユダヤ人だけではなく異邦人にも、救いの手を伸ばされていることが書かれていました。

そして今回の場面です。

まず登場するのはファリサイ派の人々です。彼らはイエス様に「天からのしるし」を求めます。さらに 14 節以降では、弟子たちの無理解が主題となります。

福音は外の世界へ	6:30-44	食事の奇跡
	6:45-52	水の上の顕現物語
	6:53-56	まとめの句
	7:1-13	父祖たちの伝承とは
	7:14-23	旧約聖書の食物規定
	7:24-30	福音は異邦人の元にも
	7:31-37	異邦人の地でのいやし
	8:1-10	二度目の供食物語
	8:11-13	ファリサイ派の人々の不信仰
	8:14-21	パンの奇跡に対する弟子の無理解

マルコによる福音書では 6 章から 8 章にかけて、イエス様がガリラヤで語り始めた福音が外の世界に広がっていく様子を伝えます。異邦人のところには順調にイエス様の福音が伝えられていきます。

しかし、ユダヤ教の律法を学び、実践していると考えていたファリサイ派の人々や、イエス様の一番近くにいた弟子たちは、いまだにイエス様のことを理解できません。この姿はわたしたちに何を伝えているのでしょうか。

## 5、節ごとに

### ◆ファリサイ派の人々の不信仰

8:11 (そして) ファリサイ派の人々が (出て) 来て、イエス (彼) を試そう (試みて) と  
して、天からのしるしを (彼に) 求め、議論をしかけた。

ファリサイ派の人々はマルコ福音書の中では、イエス様の敵対者として、またイエス様を理解しようとしなない人々の代表として描かれます。ちなみにルカ福音書の同じ物語ではしるしを求めるのは「群衆」となっています。マルコ福音書の中ではガリラヤの一般民衆は好意的に扱われているため、群衆がイエス様を試みる姿は受け入れられなかったのかもしれませんが。



ファリサイ派の人々は、イエス様に「しるし」を見せるように要求します。それはイエス様が本当に救い主であるのかを確かめるという目的もあったでしょう。またイエス様の化けの皮を剥がしてやろうという思いもあったと思います。

旧約聖書やラビ文献 (ユダヤ教の教師が残した書物) にも、しるしは預言者や教師の信頼度を証明するものとして、また否定するものとして理解されています。

わたしたちも日常に起きる不思議な出来事に戸惑い、「しるし」が欲しいと思うことはあるでしょう。たとえばイエス様の母マリアも自分がみごもったことを信じられなかったときに、天使はエリザベトのところに行くように伝えます。旧約聖書の中にも神さまの言葉がすぐには信じられずに、しるしを求めた預言者が出てきます。

しかし今回、ファリサイ派の人々は「試みて」イエス様に尋ねています。この「試みる」という言葉は荒野でサタンがイエス様を誘惑した、その「誘惑する」と同じ語です。つまりファリサイ派はサタンと同じような行動をおこしてしまったのです。

8:12 (そして) イエス (彼) は、心の中で深く嘆いて (嘆息して) 言われた (う)。「どうして、今の時代の者たちはしるしを欲しがら (求める) のだろう。はっきり言っておくれ (アーメン)。今の時代の者たちには、決してしるしは与えられない。」

イエス様は「耳が聞こえず舌の回らない人」をいやした時と同じように、深く嘆息します。イエス様の目の前にいる人たちは、ユダヤ教を深く学び、神さまの戒めを真面目に守っていたはずの人たちでした。しかし彼らファリサイ派の人々は、イエス様を試みます。この態度は、不信仰以外の何物でもありません。

イエス様の吐く息は、その現実に対する深い嘆きです。わたしたちもしるしを求めたくなることはあると思います。「こういうことが起こったら信じます」とまではいかななくても、「神さま、いるなら返事をしてください」と求めることはあるでしょう。でもそのときに、イエス様は深く嘆いておられるのかもしれない。

そしてイエス様は言います。「アーメン」と。新共同訳聖書で「はっきり言うておく」と訳されているところは、原文では「アーメン」です。3章28節にもありました。この語に続く言葉は、イエス様の宣言ともいえます。「決してしるしは与えられない」。それがイエス様の返答でした。では一体何をみて、信じればよいのでしょうか。

**8:13** **そして、彼らをそのままにして（から離れて）、また（再び）舟に乗って向こう岸へ行かれた。**

イエス様はファリサイ派の人々から離れていきます。この「離れた」ですが、距離だけではない、もっと深い意味で考えることもできると思います。ファリサイ派の人々は、イエス様を試みていました。そしてそのまま、置いていかれたのです。

イエス様はまた舟に乗ります。これまでイエス様たちは舟で、ユダヤ人のいる場所と異邦人の地とを行き来していました。しかしそれも、この場面で最後です。ここからは、エルサレムへ向けて少しずつ進んでいくのです。

### <ここまでの箇所から>

しるしには、神さまから一方的に与えられるものと、人間の側から求めるものとあります。ある本には、前者は信仰を強めるが、後者は信仰を破壊するとありました。

わたしたちは、しるしを欲しがります。約束手形を求め、本当に自分が歩く道が間違っていないか示してほしいと考えることもあるでしょう。しかしイエス様はそのような思いを良しとされません。

なぜならどのような「しるし」を見せられても、わたしたちは満足しないからです。聖書と同じ出来事が目の前で起こったとしても、「それでも信じられない」と言ってしまうのが人間なのです。

目に見え、手で触れることのできる証拠がないと信じられないというのであれば、それはもはや信仰とは呼べないということなのかもしれません。

#### ◆パンの奇跡に対する弟子の無理解

8:14 (そして) 弟子たち(彼ら)はパンを持って来るのを忘れ、舟の中には一つのパンしか持ち合わせていなかった。

ここから舞台は、舟の上へと移ります。13節でファリサイ派の人々は残されたので、舟にはイエス様と弟子たちが乗っているようです。

マルコ福音書には 6:30～44 と 8:1～10 に供食物語がありました。それからそれほど時間が経っていないのに、またパンのことで悩む弟子の姿が描かれています。この姿は、弟子たちがまた無理解のままであることを強調しています。



しかし舟にパンがまったくなかったわけではありません。パンは一つ、舟にありました。

8:15 そのとき、イエス(彼)は(彼らに)、「(見よ。)ファリサイ派の人々のパン種とヘロデのパン種によく気をつけなさい」と戒められた。

突然イエス様は弟子たちを戒めます。ここに出てくるファリサイ派とヘロデはイエス様の敵として福音書の初めから登場します。ファリサイ派は律法順守という外面的な行為で、またヘロデは世俗の権威を用いることで、神さまに近づこうとしていました。

さてパン種ですが、聖書にはよい意味と悪い意味とで用いられています。神の国のたとえとして出てくるルカ 13 章 20～21 節はよい意味です。しかし否定的な意味の方が圧倒的に多いです。

パン種は粉に練り込むことによって、腐敗し、それが全体に広がっていくと考えられました。昔「3年B組金八先生」というドラマで、「腐ったミカン」というたとえが用いられました。腐ったミカンがミカン箱に一個あるだけで、すべてのミカンが腐ってしまうという意味でした。パン種もそのように考えられていたようです。

そのため、「悪しき罪」と同じように考えられ、過越祭の規定では家の中からパン種を一掃しなければならず、またパン種を神さまへの穀物の献げ物の中に入れてもいけませんでした。

イエス様はファリサイ派の人やヘロデの不信仰が、弟子たちの間にも広がっていかないように警告をしたようです。しかし突然脈略もなくイエス様が言った結果、弟子たちの耳にはその意味がきちんと届きませんでした。

8:16 (そして) 弟子たち(彼ら)は、これは自分たちがパンを持っていないからなのだと(ことについて、互いに)論じ合っていた。

弟子たちはイエス様のせつかくの戒めをきちんと聞こうとはせず、自分たちの関心事であるパンのことにばかり気をとられていました。ここまで弟子たちとイエス様との間で思いの違いが大きいと、少し心配になります。

しかしわたしたちも、自分の関心事にばかり気を取られてしまい、大切なことを見逃す(聞き逃す)ことはよくあります。それは心の目や耳が「思い煩い」でおおわれてしまうからなのです。

8:17 (そして) イエス(彼)は(彼らに)それに気づいて(を知って)言われた(う)。「なぜ、パンを持っていないことで議論するのか。まだ、分からないのか。悟らないのか。(あなたたちの)心がかたくなになっているのか。

6章52節にこうあります。「パンの出来事を理解せず、心が鈍くなっていたからである」。その場面でイエス様は、湖の上を歩いて弟子たちの元に来ます。弟子たちは逆風に悩まされていましたが、イエス様が舟に乗り込まれると風が静まります。それを見て弟子たちは、非常に驚きます。その理由が「パンの出来事を理解せず、心が鈍くなっていたからである」。

同じように今回も、パンの出来事が理解できないまま、心がかたくなになっています。つまり弟子たちの心は、ファリサイ派やヘロデのパン種によってすでに腐敗しているとも言えるのです。

8:18 目があっても見えないのか。耳があっても聞こえないのか。(あなたたちは)覚えていないのか。

弟子たちに覚えておいてほしかったこと、それは19～20節にもある供食の奇跡物語でした。あの時にもおなじように、弟子たちはパンが足りないとあきらめていました。しかし二度も、不思議な業が目の前でおこなわれたはずです。

遠くで見ただけならまだしも、弟子たちは自らの手で、群衆の元に食糧を運んだのです。それなのに、パンがないと言い合う弟子たち。しかしわたしたちはその姿を見て、「何をやっているんだ」と言えるのでしょうか。神さまは、わたしたちにたくさんの恵みをくださっています。でもすぐにそのことを忘れてしまい、どうしたらいいのだろうかと戸惑ってしまふ。その姿は、舟の上でパンのことで思い悩む弟子たちと同じなのかもしれません。

**8:19-20** わたしが五千人に五つのパンを裂いたとき、集めたパンの屑でいっぱいになった籠は、幾つあったか。」弟子たちは、「十二です」と言った。「七つのパンを四千人に裂いたときには、集めたパンの屑でいっぱいになった籠は、幾つあったか。」「七つです」と言うと、

このような数字をいくら覚えていても、信仰にはつながりません。知識がいくらあっても駄目なのです。大切なのは、このことをおこなった方は何者なのか、ということだけです。

イエス様は命のパンです。しかし弟子たちは物質的なパンに関心を寄せてしまい、本質を見失っていました。



**8:21** (そして) イエス (彼) は (彼らに)、「まだ悟らないのか」と言われた。

「悟る」とは理解するということです。しかしイエス様は決して頭で理解するように言われているではありません。イエス様とは何者なのかを知るということです。弟子たちはまだイエス様が何者か、知ることができません。いつになったら弟子たちは、悟ることができるのでしょうか。

### <今日の箇所から>

マルコ福音書はイエス様を理解できなかった弟子たちの姿を、徹底的に描きます。十字架と復活なしには、イエス様の本当の姿はわからないというのが、この福音書の伝えたかったところなのです。

しかし、この弟子たちの弱さはわたしたちに勇気をも与えてくれるのではないのでしょうか。イエス様を理解できず、恐れの中で逃げ回り、また否認する弟子たちの姿が、これまでも、これからも描かれていきます。それと同時に、そのような彼らを決して離さないイエス様がそこにはおられます。

「まだ悟らないのか」という呼びかけは、弟子たちと同じように弱いわたしたち一人ひとりに対して語られています。わたしたちはイエス様のことを悟るために、福音書を読み、日々の生活の中でイエス様の存在を感じていくのです。

今回の学びはこれで終わります。次回は9月22日(木)10時30分からです。「目の見えない人のいやし、ペトロの信仰告白」(マルコ8:22~30)について学んでいきます。